吉村会長のCoffee Break

第4回　北朝鮮に行ってみた〈後編〉

私が北朝鮮を訪問したのは2015年10月。北朝鮮の水問題に関して信頼できる情報が当時極端に少なかったため、水の専門家として、自分の目と足で「北朝鮮の水問題」を直接確認するのが目的であった。

◎北朝鮮の水資源の状況

平壌での年間降雨量は例年1000～1200ミリであり、水インフラがしっかりしていれば国民（約2400万人）が水に困ることはない。しかし2014年は、年間平均降水量が平年の57%で深刻な干ばつに直面し、農作物に重大な被害が出ていた。北朝鮮当局は2015年の初めから「コメとトウモロコシを主体とする食糧」を住民一人当たり380ｇ（トウモロコシ9割、コメ1割の割合）配給しているが、国連が推奨する最低基準（一人一日当たり600ｇ）を大きく下回っていた。つまり国民の半数、約1050万人が栄養失調になっていると国連は警告していた。

◎北朝鮮の水道の実態

平壌市内（約220万人居住）では、市内のビルやホテル、住宅には水道が完備されているが、水が出ないことが多かった。これは施設の老朽化と電力不足でポンプが稼働できないためだった。案内された市内のビルやレストランのトイレには、大きな水タンクが複数常設され、用を足した後、ひしゃくで水を汲み、自分で流すことが要求された。

NASAの衛星写真から見た北朝鮮と周囲の国
2014年2月26日撮影

農村部（2300万人）では、軍事境界線の板門店までの3時間の移動中、農村部には水道施設らしきものは一切なく、河川水や地下水に頼っているものと思われた。山ははげ山（燃料で伐採済み）が多く、田畑の牛は、あばら骨が見える程やせ細っており、農民の食料不足が伺えた。最大の問題は電力供給だった。地方の場合は良くて1日1～4時間の限定給電であり、水道どころか日常生活に大きな影響を与えていた。どの位電力が足りないかは、NASAの衛星写真を見れば一目で判断できた。暗闇の中に浮かぶ平壌市内の明かりしか見えないのだった。

（吉村和就／習志野市国際交流協会会長、国連テクニカルアドバイザー）

習志野市国際交流協会

会報　スクエア第148号

「吉村会長のCoffee Break」